

支え合い事例コラム集

くるめ支え合うプラン掲載記事から

目次

関係を豊かにする

①つながりの構築 … P 4

『個別課題から地域の支え合いを考える』
『「やってみたい」「これ楽しい」から始まる気づき』
『知り合うことで、活動が活発に』

②見守り活動の推進 … P 7

『安全で安心して暮らせるまちに』
『お互いにあたたかい気持ちになる』
『異変に気づいたら連絡を』

③誰もが集える場の拡充 … P 10

『施設もボランティアも“お互いさま”』
『麻雀で健康に』
『みんな あつまれ』
『帰りにちょっと、寄り道しませんか』
『みんなが楽しくまあいっしょに和になって』

寄り添う体制を整える

④個別の対応が必要な人への支援 … P 15

『気になる人、気にかけている人を“つなぐ”支え合い』

⑤災害時に支援が必要な人への支援 … P 16

『避難行動要支援者名簿を活用した地域づくり』
『いざというときに、「助けて」と言えるように』

⑥権利擁護の推進 … P 18

『すべての人が安心できるくらしのために』

⑦多機関連携の推進 … P 19

『見つけよう。新しい“つながりのカタチ”』

⑧財源確保の推進 … P 20

『“もったいない”を“ありがとう”へ』
『キーワードは“WIN & WIN & WIN”』

目次

地域をともに創る人を育む

⑨地域における人材の育成 … P 2 2

『校区の将来をみんなで考えよう』
『ボランティア活動のサロンへの展開』

⑩地域コミュニティ組織等への支援 … P 2 4

『引っ越してきた世帯との関係づくり』
『補助金をきっかけに活動が広がる』

⑪社会福祉法人・学校・事業所等の地域貢献の促進 … P 2 6

『遊んで、食べて、みんなが笑顔』
『サロン×移動販売』
『あなたの“困った”をみんなで助けます』

⑫福祉人材の養成と資質の向上 … P 2 9

『よりよい介護サービスが提供できるように』

⑬福祉への理解を深める取組みの推進 … P 3 0

『地域のいいね（ひとにやさしい場所）を教えてください』
『福祉を学ぶ機会を』
『お互いを尊重する職場をめざして』

“支え手” “受け手” の関係も、世代も状況も。全てを超えてつながる社会へ



①つながりの構築

関係を豊かにする

『個別課題から地域の支え合いを考える』

浮島校区では、認知症の人が一人で外出し道に迷う事例が起き、今後も増加していく心配がありました。地域でどのように対応していけば良いか、支え合い推進会議で話し合い、まずは、地域住民が認知症を正しく理解する必要があるという意見から、認知症講座や認知症声かけ訓練が開催されました。

講座では、認知症の正しい理解はもとより、「大丈夫よと寄り添うなど、周囲の接し方を変えることで症状が改善する」、「大事なことは、認知症を治すことよりも、認知症の人と“ともに生きる地域や社会”である」との話がありました。

また、認知症声かけ訓練の参加者からは、「道端で少し気になる人がいたら、勇気はあるけれど声をかけて助けたい」という声があがるなど、認知症への理解が進み始めています。

支え合い推進会議では、ともに支え合う地域をめざして、地域の実情に応じた様々な取組みが進められています。



声かけ訓練の様子

① つながりの構築

関係を豊かにする

『「やってみたい」「これ楽しい」から始まる気づき』

久留米市内の複数の校区で、様々な年代の人が集まり、自分たちが住む地域のことについて話し合うラボ会が開催されています。何気ない会話から、これやってみたいねとワクワクする日もあれば、参加者の思いがけない悩みに涙する日もあり、地域ならではの情報交換が行われています。

そんな中、小森野ラボ会では、「小森野校区だけで生活できるといいね」、「散歩の途中で立ち寄れる本屋さん、パン屋さんがあるといいね」などの声があり、そこから地域の飲食店と連携した“こもりのマルシェ”が企画されました。みんなで朝ごはんを食べたり、リサイクルブック市を開いたり、みんなで話したことが実現されました。

人が集まり、つながったことで、新たな取組みが生まれ、今まで地域との関わりが少なかった人たちが、地域に興味をもち、地域について考えるきっかけとなっています。



様々な年代の人が集まるラボ会

①つながりの構築

関係を豊かにする

『知り合うことで、活動が活発に』

様々な分野で活動する市民活動団体と久留米市、久留米市社会福祉協議会とで、市民活動の活性化に向けて意見交換会を行いました。

久留米市や久留米市社会福祉協議会の施策のいいところ、足りないところ、今後必要な視点など、様々な意見が発表されました。

意見交換の目的は、今後の市民活動の活性化施策でそれぞれの団体の強みは何かを考えていくことでしたが、それ以外にも市民活動団体の皆さんが顔見知りになるきっかけとなりました。

自分の団体の悩みごとが他の団体が以前悩んだことだったり、自分の団体の不得意なことが他の団体の得意なことだったり、団体同士が知り合うことで自分たちの活動を見直すことができ、市民活動の活性化につながります。



意見交換会の様子

②見守り活動の推進

関係を豊かにする

『安全で安心して暮らせるまちに』

自分たちの住むまちを安全で安心して暮らせるまちにしていこうと、青パト（青色回転灯付パトロール車）による、パトロール活動の輪が広がっています。

現在久留米市内では、校区コミュニティ組織や企業、一般社団法人などにより約50台の青パトが活躍しています。

実際にパトロールをしている人にお話を伺うと「自分たちの取組みが、地域の見守り活動や登下校中の子どもたちの安全確保に少しでもつながれば」、「この地域の人たちが、安心して暮らせるまちにしていきたい」とのこと。

久留米市内でも見る機会が増えてきた“青パト”。パトロールをしている人たちの真剣な様子は、とても心強いものです。全国的に犯罪の認知件数は減少傾向にありますが、子どもや高齢者が被害者になる事件が話題になるなど、地域における見守り活動の重要性は高まっています。



地域を見守っている青パト

②見守り活動の推進

関係を豊かにする

『お互いにあたたかい気持ちになる』

ふれあいの会は、久留米市の地域福祉を支える団体の一つです。

訪問や見守り活動は民生委員・児童委員だけに頼っていましたが、孤立死の発生をきっかけとして、より身近な人たちが気にかけていこうと、昭和62年に組織化され始めたのがふれあいの会です。現在、多くの校区で組織され、見守り訪問活動をはじめとした様々な地域活動の担い手として活躍されています。

「来るのを待ったよ」、「話すのは楽しかね」と喜ばれると同時に、ボランティアで活動する人も喜びや生きがいを感じ、お互いがあたたかい気持ちになります。

今後も、民生委員・児童委員をはじめ、自治会や校区の各種団体など多様な主体とも連携し、地域住民にとって最も身近なボランティアとして、活躍されることが期待されます。



見守り訪問活動の様子

②見守り活動の推進

関係を豊かにする

『異変に気づいたら連絡を』

「ここ2～3日電気がついていない」、「チャイムを押しても応答がない」。

異変に気づいた地域住民から久留米市の“くるめ見守りほっとライン”に連絡があり、久留米市社会福祉協議会と連携し、本人の無事を確認しました。両親が亡くなりひとり暮らしになった40歳代の男性は、閉じこもり気味で求職中であることがわかりました。

その後、久留米市社会福祉協議会が定期的に訪問し、関係を築くことで、生活上の困りごとを把握できるようになりました。数か月後、本人の努力と生活自立支援センターや民生委員・児童委員との連携の結果、希望する仕事に就くことができました。

今回のように、ちょっとした異変を感じて連絡したことが、自立の一步につながるがあります。異変に気づいたときには、くるめ見守りほっとライン【電話0942-30-9339】にご連絡ください。



新聞が溜まっている郵便ポスト（イメージ）

③誰もが集える場の拡充

関係を豊かにする

『施設もボランティアも“お互いさま”』

荘島校区では、サロンを開設する場所がなく困っており、そのことを、地域の高齢者施設に相談したところ、場所を提供していただけることになりました。そのお礼にと、今度は施設での皿洗いなどをボランティアが行うことになりました。

サロン活動を行う場所がなくて困っていたボランティア、慢性的な人手不足に困っていた施設。つながり、支え合うことで“お互いさま”の関係が広がっています。

また、サロンには、施設の利用者も多数参加し、地域の皆さんとの新たなつながりが生まれています。

地域の皆さんと福祉施設など多様な主体が連携することで、支え合う地域づくりが進んでいます。



中央町みんなのサロンの様子

③誰もが集える場の拡充

関係を豊かにする

『麻雀で健康に』

津福校区にあるサロンでは、毎月1回、麻雀をとおした交流が行われています。

これまでは、参加者が50名を超えるサロンが年4回開催されていましたが、女性が多く、男性の参加者はごく一部でした。

そこで、男性が参加しやすく、手と頭を使って健康でありつづけようとふれあいの会の男性メンバーが企画し、麻雀サロンが始まりました。

参加者は、昔から麻雀をしていたという男性が多く、今では、他の自治会からも参加するなど、少しずつ交流が広がっています。



津福今雀健（ジャンケン）サロンの様子

③誰もが集える場の拡充

関係を豊かにする

『みんな あつまれ』

孤立しがちな子どもたちに寄り添い、活動しているボナペティは、子どもの貧困をテーマにした勉強会をきっかけに、何かできることはないかと、ひとり親家庭を支援する団体に手づくりのおにぎりを贈る活動を始めました。

次の年には、学童保育所の子どもたちと一緒に料理をする活動や、生活困窮世帯へ食品を届ける活動に発展しました。

現在は、御井校区において、地域の誰かが気軽に参加できる“ぎおんさんの森食堂”を毎月開催し、地域の子どもたちや高齢者、障害者など様々な人たちに向けた活動に広がっています。



調理を手伝う子どもたち

③誰もが集える場の拡充

関係を豊かにする

『帰りにちょっと、寄り道しませんか』

知的障害者の親を中心に障害者の生活支援や啓発活動などを行う久留米市手をつなぐ育成会は、他団体と一緒に、障害があってもなくても誰もが集える場として、毎週水曜日に“すいようカフェ”を開いています。

自由に来て、おしゃべりをしたり、ゲームをしたり、勉強したりと、それぞれが思い思いに過ごしています。

「家以外にも居場所があることがありがたい」、「普段交流していない人と話すのは楽しい」と、カフェならではの雰囲気話しやすさを生み出しており、初めての人もすぐに馴染めています。

色んな思いを抱えていても、みんなが楽しく笑える場所、帰りにちょっと、寄り道してみませんか。



すいようカフェで過ごす人たち

③誰もが集える場の拡充

関係を豊かにする

『みんなが楽しくまあ〜るく和になって』

田主丸老人福祉センターでは、誰もが安心してくつろげる居場所“楽し〇（まる）カフェ”を開催しています。

参加者は、毎月1回、100円の参加費でお茶やコーヒー、お茶菓子を食べながら、血圧測定や軽運動、講師によるミニレクチャーなどを楽しんでいます。地域のボランティアや、医療・介護の専門職などもいて、くつろいだ雰囲気の中で世間話をしながら、不安や悩みを相談できるように工夫しています。

このような居場所がもっと身近にできるよう、多様な団体などと連携しながら、地域住民の活動を支援していきます。



軽運動の様子

④個別の対応が必要な人への支援

寄り添う体制を整える

『気になる人、気にかけている人を “つなぐ”支え合い』

支援のきっかけは地域包括支援センターとケースワーカー（※）から久留米市社会福祉協議会へ、「大量の物があふれている家がある」と相談があったことでした。

その相談を受け、自宅を訪問し、本人の意思と現状を確認。「この家に住み続けたい」という思いに寄り添い、地域住民や支援関係機関と連携して自宅を片付けました。

現在、本人は自宅で、民生委員・児童委員の訪問支援や介護サービスを利用しながらいきいきと生活しています。

今後も、久留米市社会福祉協議会は、地域住民同士や地域住民と専門職などを“つなぐ”ことで、一人ひとりが住み慣れた地域で自分らしく生活できるように取り組みます。

※世帯の状況に応じて日常生活や社会的、経済的自立に向けた支援を行う人。



片付けの様子

⑤ 災害時に支援が必要な人への支援

寄り添う体制を整える

『避難行動要支援者名簿を活用した地域づくり』

きっかけは、平成27年、28年に校区全体で行った図上訓練でした。

東国分校区では、防災士や自治会役員、民生委員・児童委員など、地域の避難支援を担当する人たちが中心となって、避難行動要支援者名簿を活用した図上訓練を行い、災害が起こった場合に、一人で避難することに不安がある人の支援体制づくりを進めています。

この取組みが継続的に行われることで、校区全体の防災意識が向上し、災害が起こった場合の避難支援がスムーズになることはもとより、日頃の見守りが自然と行われるなど地域のつながりが一層強まることをめざしています。



図上訓練の様子

⑤ 災害時に支援が必要な人への支援

寄り添う体制を整える

『いざというときに「助けて」と言えるように』

「自分は高齢で、妻は車いすを使用している。災害が起こったときの避難が心配だ」という相談がありました。

災害に備えて、どのような行動や準備が必要なのかを考えると、自力での避難は難しいことがわかりました。

そこで、相談者や久留米市社会福祉協議会の職員、地域住民、ケアマネジャー、民生委員・児童委員など関係者が集まり、安心して避難する方法を話し合いました。

相談者に近所づきあいがあったこともあり、避難が必要などときには、隣近所の人が声をかけ、一緒に避難しようということになりました。

その後、実際に大雨が降ったときには、話し合いに参加した人から、避難の声かけなどが行われ、支え合いの輪が広がっています。



災害時に備えて必要なものを考えているところ

⑥権利擁護の推進

寄り添う体制を整える

『すべての人が安心できるくらしのために』

久留米市社会福祉協議会では、法人として成年後見人等の役割を担う法人後見事業を行っています。

福祉施設入所の話が進んでいる人の成年後見人を受任し、何度も会って話をするうちに、本当は「これまで通り自宅で生活したい」という思いがあることが分かりました。本人の思いを実現するために、成年後見人として関わり、ヘルパーによる支援を充実させたことで、今も自宅での生活を続けています。多少の不便があっても、その生活に本人は納得しており、家族や支援者も本人の生活を支えることができます。

このように障害や認知症などで自分の意思を伝えることが難しい人でも、成年後見人等が本人の思いを尊重し、耳を傾け、地域の人や民生委員・児童委員、医療・福祉の関係者など様々な支援者と連携することにより、自分の生活を自分で選び、住み慣れた地域で安心して暮らすことができるようになります。



成年後見センターでの相談の様子

7 多機関連携の推進

寄り添う体制を整える

『見つけよう。新しい“つながりのカタチ”』

近年、社会情勢が変化し、既存の制度では対応できない制度の狭間の課題が増えてきています。

「自分たち（一つの分野）だけでは解決できない」、
「他の分野の人に相談したい」などの専門職の声を受けて、「顔の見える関係づくり」をめざし、多機関連携部会研修会を開催しました。研修会では、高齢者・障害者・子ども・生活困窮者などの支援関係機関が一堂に会し、“地域を基盤とした多機関連携を考える”をテーマにした講演の後、圏域ごとに分かれ、困りごとや普段聞けなかったことなど率直な意見交換が行われました。

参加者からは、「顔見知りになれたことで相談しやすくなった」、「お互いの業務を知ることができ、困ったときには相談したい」など前向きな意見が多くありました。

今後は、専門職だけでなく、地域住民も一緒に集まって、顔の見える関係を構築し、様々な課題の解決に取り組んでいきます。



圏域ごとの意見交換の様子

⑧財源確保の推進

寄り添う体制を整える

『“もったいない”を“ありがとう”へ』

日々の生活に困窮する家庭が増加する一方で、品質に問題がないにも関わらず、包装の傷みや商業のルールなどで、市場に流通できなくなった膨大な量の食品が廃棄されています。

このような中、フードバンクくるめは、企業や農家・団体・個人などから寄贈された食品を子ども（地域）食堂、生活困窮家庭、社会福祉施設に無償で提供し、地域で食品ロスと貧困の架け橋となっています。

代表者は、「誰しも目の前に溺れている人がいたら助けると思います。しかし、生活困窮者には支援の手が届きにくいのが現状です」と話されました。そして、さらに多種多量の食品を集め、支援者と支援先の輪を拡げていきたいとの思いから、公的な補助金だけでは不足する資金を、クラウドファンディング（※）を活用して調達し、業務用冷蔵庫などを購入されました。

どのボランティア団体も財源確保が課題となっている中で、今後は補助金だけでなく、クラウドファンディングなど新たな資金調達が求められています。

※インターネットを活用して、資金の提供を募ること



食品仕分けの様子

⑧財源確保の推進

寄り添う体制を整える

『キーワードは“WIN & WIN & WIN”』

福岡県共同募金会久留米市支会では、地域福祉推進のための財源確保の新たな取組みとして、共同募金会と企業などが連携した、寄付つき商品の開発に取り組んでいます。

ある企業では、取り扱う自賠責保険が契約または更新されたとき、1件につき100円ずつの合計200円を共同募金会と久留米市社会福祉協議会に寄付されています。

寄付つき商品は、企業は社会貢献事業として、購入者は募金として、共同募金会は地域福祉事業の財源として、すべてにメリットがある“WIN & WIN & WIN”な取組みです。

参加協力いただける企業を募集しています。



赤い羽根共同募金 募金百貨店プロジェクト

⑨地域における人材の育成

地域をともに創る人を育む

『校区の将来をみんなで考えよう』

大橋校区では、支え合い推進会議の取組みの中で、支え合いについて関心がある人や、「できることを無理なくしていきたい」、「日常の声かけから始めていきたい」といった前向きな思いをもっている人が多いことが分かりました。

そこで、新たな担い手を募ることを目的とした生活支援ボランティア養成講座が実施され、さらに実際に活動できる人を対象とした座談会が開催されました。

座談会では、自治会ごとにグループに分かれ、意見交換をし、「まずは、地域住民同士が顔馴染みの関係になること、さらには助けてと言いつける関係になることが大事」など、具体的な意見が出され、活発な協議の場となりました。

生活支援ボランティア団体の立ち上げに向けて、できることから進めています。



座談会での話し合いの様子

⑨地域における人材の育成

地域をともに創る人を育む

『ボランティア活動のサロンへの展開』

「ボランティアの成り手が少ない」と言われる中で、新たにボランティア団体が結成されました。

くるめ蕎麦打ち迷人の会とかっぱコーヒーの会は、ボランティア活動をしたいけれど、なかなか活動に踏み出せなかった人たちが、蕎麦やコーヒーをとおして地域貢献するために立ち上げた団体です。

主に地域で開催されているいきいきサロンや各種イベントの参加者に楽しんでもらおうと活動しています。ボランティアの皆さんは、日々練習や話し合いを重ねており、参加者の笑顔を自分たちの生きがいに変え、今後も地域とともに活動していきます。



サロンで蕎麦打ち体験



つつじマーチで
コーヒーのふるまい

10 地域コミュニティ組織等への支援

地域をともに創る人を育む

『引っ越してきた世帯との関係づくり』

三潺校区早津崎自治会の区域は、その立地の良さも手伝って、転入者が多い地域です。

自治会に加入した転入者が早く地域に馴染み、地域に愛着をもってもらえるよう、初めての自治会の総会ときには、なるべく家族全員で参加してもらい、自己紹介などをして、早津崎産のおいしい米を贈っています。

このような工夫から、地域の子どもと大人が明るくあいさつを交わし合う地域となり、地域の清掃活動やグラウンドゴルフ大会などのときには、家族全員で参加する世帯もあるとのこと。

この関係が、日常生活だけでなく、災害時の支え合いにつながることは言うまでもありません。

自治会加入をきっかけとして、地域の人と人が“顔の見える関係”でつながり、日常生活の中で何気ない支え合いが行われています。



グラウンドゴルフ大会の様子

10 地域コミュニティ組織等への支援

地域をともに創る人を育む

『補助金をきっかけに活動が広がる』

久留米市では、地域住民等との協働によるまちづくりを進めるため、久留米市市民活動・絆づくり推進事業で市民活動団体に対する財政的支援を行っています。

多胎児育児を支援しているツインズクラブは、この補助金を活用し、ふたごやみつごを育てる家庭の保護者同士の交流を行っており、多胎児育児の悩みが少しでも軽くなるようにと活動しています。

また、全国ギャンブル依存症家族の会福岡はギャンブル依存症に悩む家族からの相談を受けたり、ギャンブル依存症についての予防啓発に取り組んだりしています。

行政だけでは、地域住民等の細やかなニーズに対応することは難しいため、市民活動団体を財政的に支援することで、新たな活動が芽生えたり、既存の活動が発展したりするなど、様々な分野に活動が広がり、協働のまちづくりが進んでいきます。



ツインズクラブの皆さん

ギャンブル依存症についての
研修会



11 社会福祉法人・学校・事業所等の地域貢献の促進

地域をともに創る人を育む

『遊んで、食べて、みんなが笑顔』

「もう1回やりたい」、「焼きそば美味しい」。

御井校区コミュニティセンターで、久留米大学の学生たちが企画した子ども食堂が開催されました。小学生が大学生と楽しく過ごす夏休みの思い出づくりをコンセプトに“おもいで食堂”と名づけ、学生たちが縁日にありそうなゲームや食べ物を考え、子どもたちに喜んでもらえるよう、すべて手づくりで準備しました。

御井小学校の協力のもと、当日は多くの子どもが集まりました。食事は、様々な団体から寄付していただいた野菜やお米を使い、また、一度に大量の食事をつくったことがない学生たちは、御井校区ふれあいの会の会長の協力を得て、焼きそばとおにぎりを調理しました。

大学生と小学生がともに遊び、同じごはんを食べ、笑顔あふれる一日となりました。大学が地域とつながることで、新たな出会いや居場所づくりのきっかけとなっています。



射的で遊ぶ子どもと大学生

11 社会福祉法人・学校・ 事業所等の地域貢献の促進

地域をともに創る人を育む

『サロン×移動販売』

江上校区では、「店が遠くて買い物に行けない」、「買ったものが重くて運べない」など、高齢者の困りごとが挙がっていました。

そこで、“高齢者が集う場”と“買い物支援事業”を組み合わせたのが金曜サロンです。毎月第4金曜日に江上校区コミュニティセンターで開催され、移動販売車が訪れると、多くの地域住民でにぎわっています。

地域住民の困りごとと、力になりたいという事業所の思いがつながり、新しい支え合いが生まれました。

地域住民だけでは解決できない困りごとがあっても、まちの商店などと協力しながら、取組みが進められています。



買い物を楽しむ地域住民

11 社会福祉法人・学校・事業所等の地域貢献の促進

地域をともに創る人を育む

『あなたの“困った”をみんなで助けます』

近年、生活困窮、孤立死、DVなど、既存の制度では対応できない課題を抱える人も少なくありません。

社会福祉法人で組織するライフレスキュー久留米連絡会では、制度の狭間で困っている住民の困りごとが解決できるように社会福祉法人が連携する社会貢献の取り組みを行っています。

生活環境の改善が必要な40歳代のひとり暮らしの男性の事例では、社会福祉法人が連携して、自宅の環境を整えました。その後は、本人が清潔な環境を維持し、少しでも元気に生活できるよう、法人からの生活品の提供や就労のための施設見学などの支援を行ってきました。

今後も、制度の狭間の課題を抱える人に対し、社会福祉法人の専門性や強みを活かしながら支援し、さらには地域の団体との連携やネットワークを構築していくことをめざしていきます。



自宅の環境整備の様子

12 福祉人材の養成と資質の向上

地域をともに創る人を育む

『よりよい介護サービスが提供できるように』

久留米市及び近郊の介護事業者が集まって設立された久留米市介護サービス事業者協議会では、介護サービス事業所職員の知識や技術の向上、職員定着率の向上をめざし、様々な研修を行っています。

「介護現場におけるコミュニケーションの基本について学べた」、「振り返りができ、現場で使える知識や技術を得られた」など、研修の場で得られたものが、日頃のサービスの質の向上につながっています。

介護現場における人材不足が大きな課題となっていますが、こういった研修の場が、介護の仕事への不安を減らし、介護の職場の魅力を発信する場となり、新たな人材の発掘（職員の定着）につながっています。



研修会の様子

13 福祉への理解を深める取り組みの推進

地域とともに創る人を育む

『地域のいいね（ひとにやさしい場所） を教えてください』

障害がある子とその親が、地域とつながり、ともに生きることをめざして活動している団体、輪をつくろうは、江南中学校区で障害者・高齢者・子どもなど、誰にとっても「いいね」と思える場所、人にやさしいお店を掲載した“地域いいねMAP”をつくりました。

地域の皆さんの協力で完成した地域いいねMAPは、子どもたちの手で、掲載されたお店やコミュニティセンターなど、多くの場所へ届けられました。

この地域いいねMAPが、地域にある様々な場所、いいところを知るきっかけとなり、人や地域とのつながりをより一層深めています。

現在は、「自分たちの地域でもつくりたい」と、取り組みが広がっています。



魚屋さんに地域いいね
MAPを届けているところ



MAPづくりのための話し合い

13 福祉への理解を深める取り組みの推進

地域をともに創る人を育む

『福祉を学ぶ機会を』

久留米市社会福祉協議会では、障害のある人など様々な立場の人の思いを知るため、学校や事業所において、車いすの操作体験や、アイマスクでの歩行体験、さらには、ゲストティーチャーを招いての福祉教育を進めています。擬似的に体験するだけでなく、障害のある人の体験や思いを直接聞くことで、想像力が高まり、理解につながります。

福祉教育は、出会いや関わりをとおして、人と人とのつながりの重要性に気づき、自分と違う立場の人を認め合い、ともに生きていく力、人の気持ちに共感できる力、考えを共有し実行する力などを育むことをめざしています。

今後、そうした気づきなどがより一層広まるよう、福祉教育の充実等について検討していきます。



ゲストティーチャーの講演

13 福祉への理解を深める取り組みの推進

地域をともに創る人を育む

『お互いを尊重する職場をめざして』

企業も社会を構成する一員として、人権を守る社会をともに創り出していくことが求められています。

久留米市では、講師の紹介や研修教材（ビデオ・図書の貸出しなどを行い、人権教育及び人権啓発の取組みを促進しています。その内容は、同和問題をはじめ、男女平等や各種ハラスメント、性的少数者に関すること、認知症や虐待、外国人労働者に関することなど企業の希望に応じ、様々です。

最近では病院や福祉施設などへの研修の機会も多くなってきました。すべての人の人権が尊重される職場をめざして、今後も当事者の声や思いなどを伝える機会をつくっていきけるよう働きかけていきます。



研修で近くの人と意見交換する様子